

第1章 人口と世帯

● 第1節 人口の構成 ●

1 男女別人口

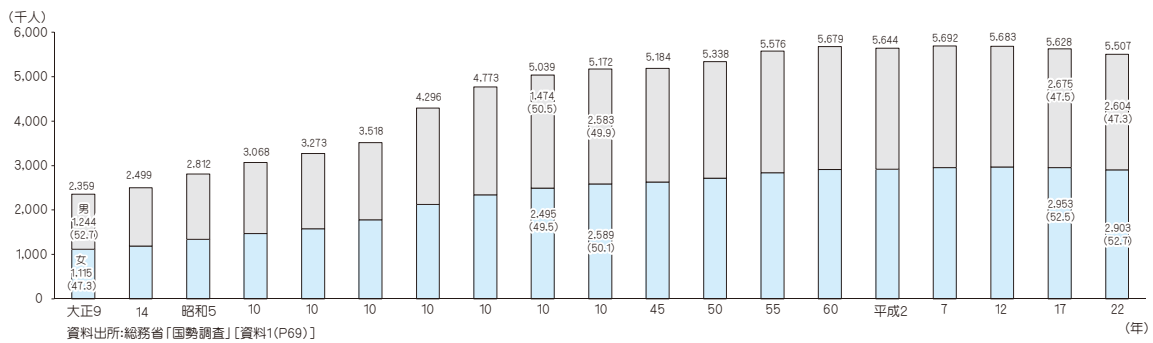
平成22年の「国勢調査」によると、本道の総人口は、550万7千人、そのうち女性は290万3千人、男性は260万4千人で、女性は男性より29万9千人多く、本道の総人口の52.7%を占めています。

男女別の人口の推移をみると、女性の人口増加率は、戦争の影響による一時期を除き男性と比べ高く、昭和40年には男女の人口比率が逆転して女性が男性を上回り、その後も総人口に占める女性の割合は年々高くなってきています。(図表1-1-1、2)

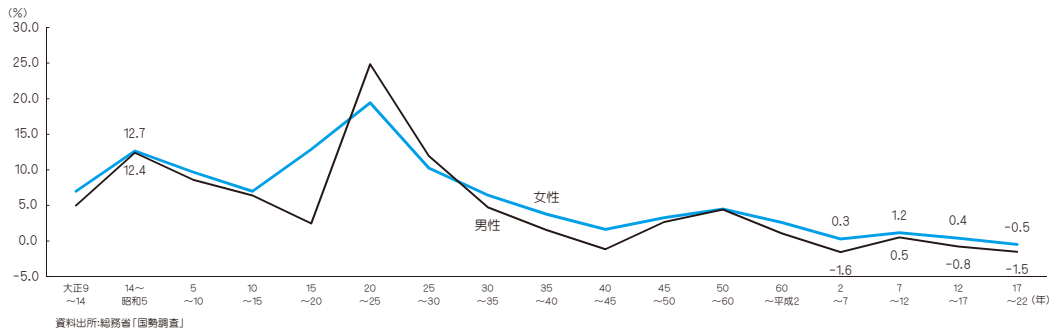
人口性比(*)を全国と比べると、昭和20年代まで一貫して全国を上回っていましたが、昭和30年以降は徐々に低下を続け、昭和50年には逆転し、その後さらに差が広がって、平成22年には全国の94.8に対して本道は89.7となりました。(図表1-1-3)

*** 人口性比**
女性100人に対する男性の数

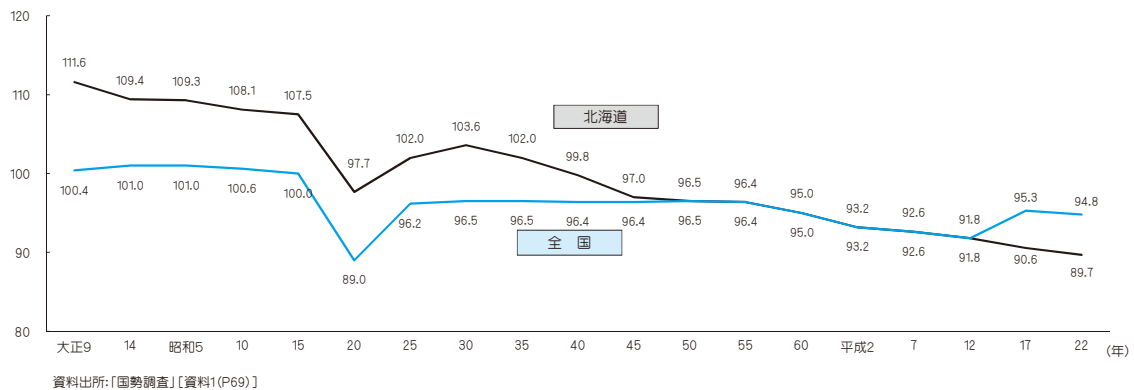
図表1-1-1 男女別人口の推移(北海道)



図表1-1-2 男女別人口増減率の推移(北海道)



図表1-1-3 人口性比の推移(北海道、全国)



2 年齢別人口

平成22年の人口に占める年齢3区分の割合をみると、0歳～14歳の年少人口の割合は12.0%、15～64歳の生産年齢人口は63.3%、65歳以上の老年人口は24.7%となっています。

この年齢3区分別人口の推移をみると、年少人口の割合は昭和25年の38.6%から一貫して減少している一方で、老年人口は、昭和30年代以降増加を続け、近年になるほど高い割合となっています。平成17年の構成比と比べると、年少人口、生産年齢人口ともに、それぞれ0.8ポイント、4.1ポイント低下する一方で、老年人口は3.3ポイント上昇しています。

(図表1-1-4)

年少人口の減少と老年人口の増加により、老年化指数は平成17年には167.7であったものが、平成22年には206.4となっています。

(図表1-1-5)

また、平成22年の「国勢調査」で年齢階級別にみると、戦後の昭和22年から24年の第1次ベビーブーム期の60～64歳と昭和46年から49年の第2次ベビーブーム期の35～39歳の年齢層の人口が増えているのが特徴的で、その後は出生数の減少により、人口も減少しています。

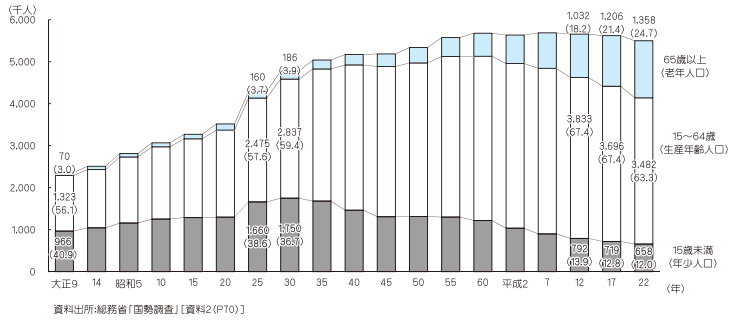
これを男女別にみると、20歳以上のすべての年齢階級で女性が多図表1-1-6く、人口性比が100を下回り、全国平均に比べ特に25歳から59歳の各年齢階級で人口性比が低くなっています。

(図表1-1-6)

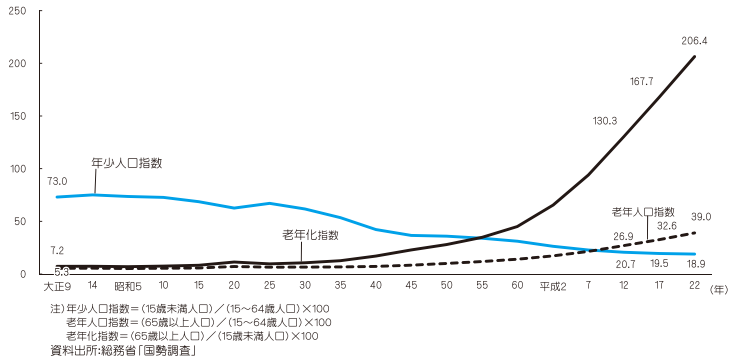
65歳以上の老年人口全体に占める女性の割合は57.2%、75歳以上の後期高齢者人口では63.0%と高い割合となっています。

[資料2(P70)]

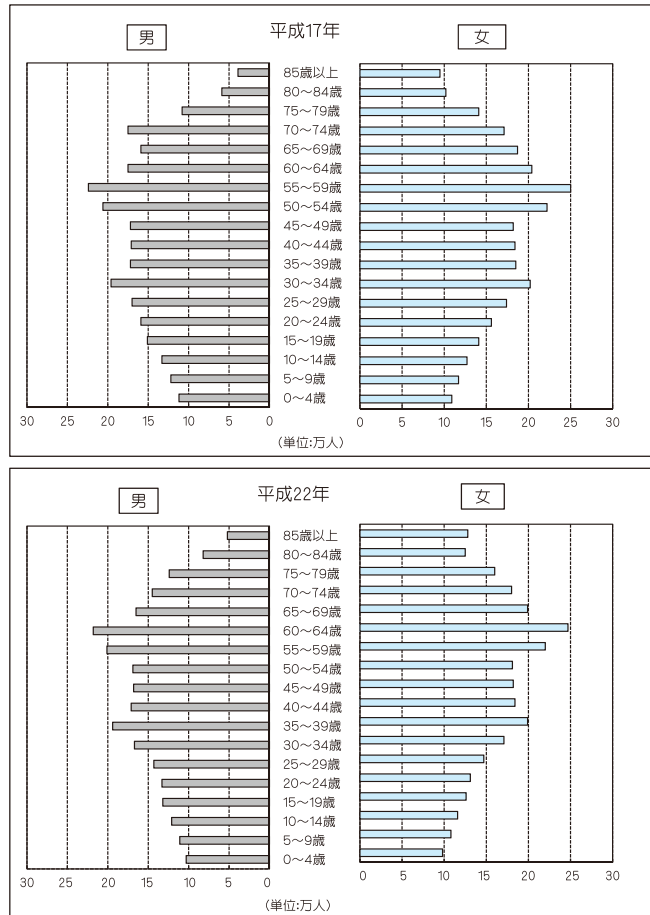
図表1-1-4 年齢別人口の推移(北海道)



図表1-1-5 年齢構造指数の推移(北海道)



図表1-1-6 人口構成(北海道)



資料出所:総務省「国勢調査」

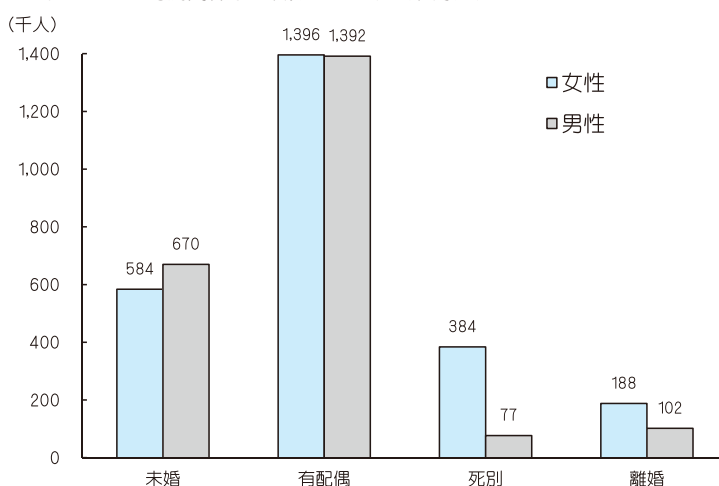
3 配偶関係別人口

平成22年の15歳以上の女性の配偶関係をみると、有配偶率は54.2%、未婚率は22.7%、男性では、有配偶率は61.5%、未婚率は29.6%となっています。

平成17年と比べると、女性の有配偶率は、1.5ポイント減少していますが、未婚率は増減がありません。

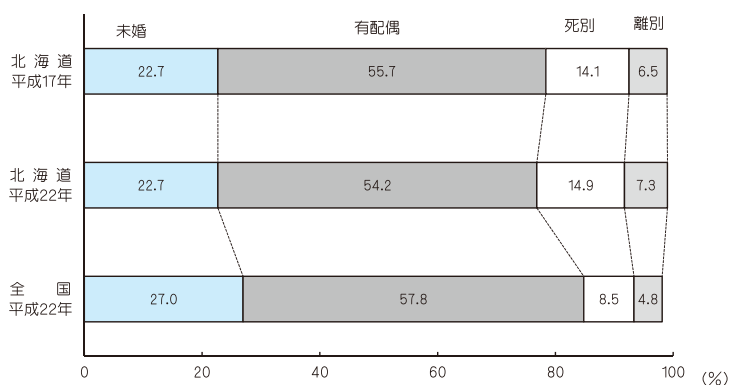
また、平成22年の女性の死別率は14.9%で、全国平均の8.5%と比べると高く、離別率は6.5%で、全国平均の4.8%と比べると高くなっています。（図表1-1-7、8）

図表1-1-7 配偶関係別15歳以上の人口(北海道)



資料出所:総務省「国勢調査」(平成22年) [資料3 (PT1)]

図表1-1-8 女性の配偶関係別15歳以上の人口の割合(北海道、全国)



資料出所:総務省「国勢調査」 [資料3 (PT1)]

●第2節 世帯の構成●

1 世帯規模

平成22年の「国勢調査」によると、本道の一般世帯は、241万9千世帯、その世帯人員は552万2千人で、1世帯当たり人員は2.21人となっています。

平成17年からの5年間に一般世帯は5万世帯、2.1%増加していますが、1世帯当たり人員は、2.31人から0.1人減少しており、昭和30年代以降、世帯規模の縮小傾向が続いています。（図表1-2-1）

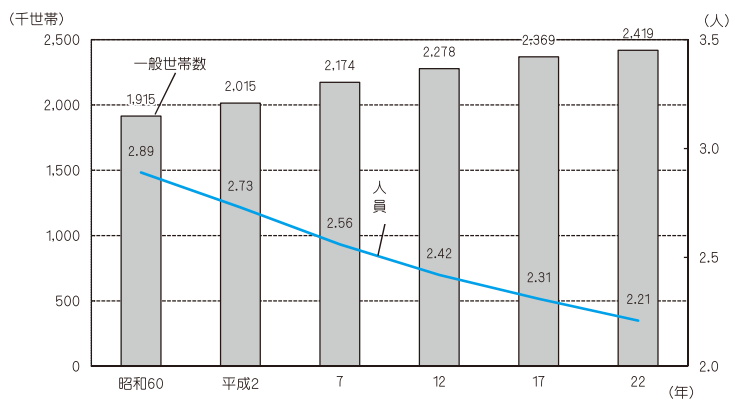
このような世帯数の増加と1世帯当たりの人員の減少は全国的な傾向となっています。

一般世帯の世帯人員分布をみると、ひとり世帯が34.8%と最も多く、以下2人世帯が31.8%、3人世帯が17.3%、4人世帯が11.6%と続き、4人以下の世帯が全体の90%以上を占めています。

平成17年からの5年間で、3人以上の世帯が減少し、1人世帯が2.4ポイントの増、2人世帯が0.8ポイントの増と小規模世帯の増加が目立っています。

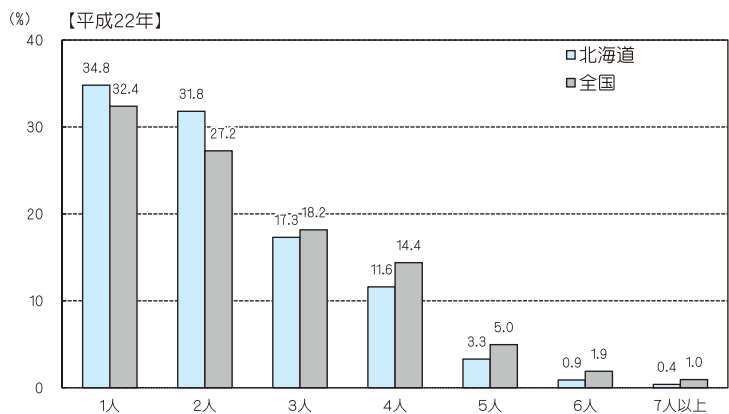
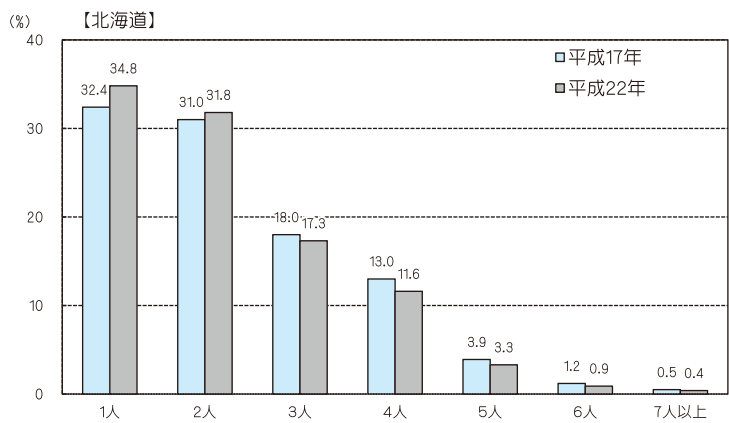
1世帯当たり人員は、全国平均2.42人に比べ0.21人少なく、また1人世帯及び2人世帯の割合が全国平均を上回っており、全国と比べて、世帯規模の小さい世帯の割合が高いことを示しています。（図表1-2-2）

図表1-2-1 一般世帯数と1世帯当たり人員の推移(北海道)



資料出所:総務省「国勢調査」[資料4(P72)]

図表1-2-2 世帯人員別一般世帯数の割合



資料出所:総務省「国勢調査」

2 家族構成

家族構成は、一般世帯に占める親族世帯の割合は64.4%、非親族世帯0.9%、単独世帯34.8%となっています。

親族世帯のうち核家族世帯は、一般世帯の57.5%を占めています。

全国と比べると、核家族世帯と単独世帯の割合が高くなっています。

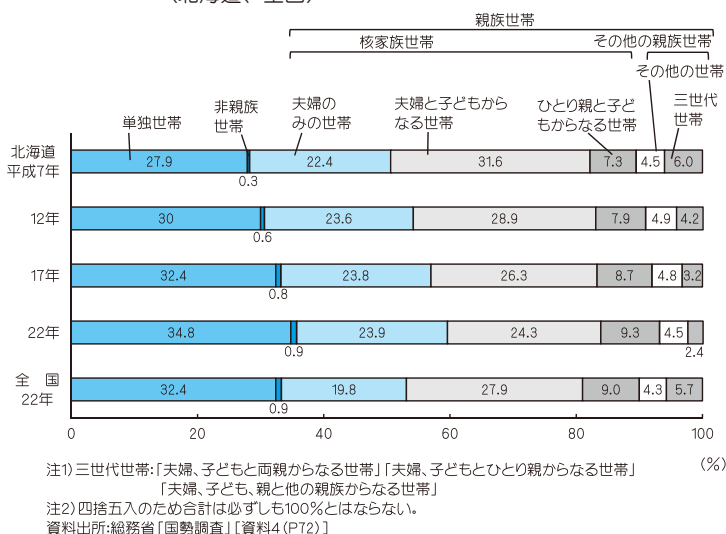
これを平成17年と比べると、三世帯世帯の割合が減少する一方、単独世帯の増加が目立ち、一般世帯の3分の1以上を占めるようになりました。

次に核家族世帯の内訳をみると、夫婦のみの世帯は一般世帯の23.9%、夫婦と子どもの世帯24.3%となっており、全国と比べると夫婦のみの世帯の比率が高くなっています。

また、平成17年と比べると、夫婦のみの世帯は0.1ポイント増加したのに対し、夫婦と子どもの世帯は2.0ポイント減少しています。

(図表1-2-3)

図表1-2-3 一般世帯の家族類型別割合の推移
(北海道、全国)



3 高齢者世帯

65歳以上の親族のいる世帯は、88万5千世帯で、一般世帯総数の36.6%を占め、平成17年からの5年間で9万1千世帯、率にして11.5ポイント増加しており、一般世帯数の増加率2.1ポイントを大きく上回っています。

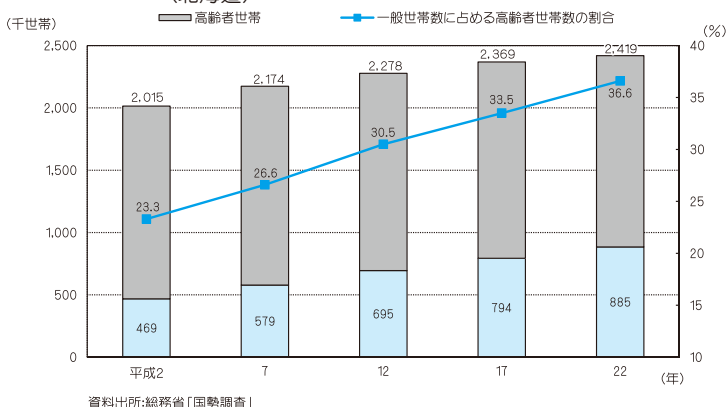
特に、夫婦のみの世帯のうち夫婦ともに65歳以上の世帯が、30万1千世帯で9.5ポイント増、65歳以上ひとり暮らしの世帯のうち女性は19万5千世帯で21.1ポイント増となっています。

道内の高齢者100人のうち約16人がひとり暮らしをしていることになり、そのうち女性が約8割近くを占めています。

男女の平均寿命の差や夫と妻との年齢差などから、女性の高齢者単独世帯が多い傾向となっています。

(図表1-2-4)
(資料5(P73))

図表1-2-4 一般世帯数に占める高齢者世帯数と割合の推移
(北海道)



4 ひとり親世帯

平成22年の道内のひとり親世帯数は、5万5,052世帯で、一般世帯数の2.3%を占めており、全国より0.6ポイントを上回っています。

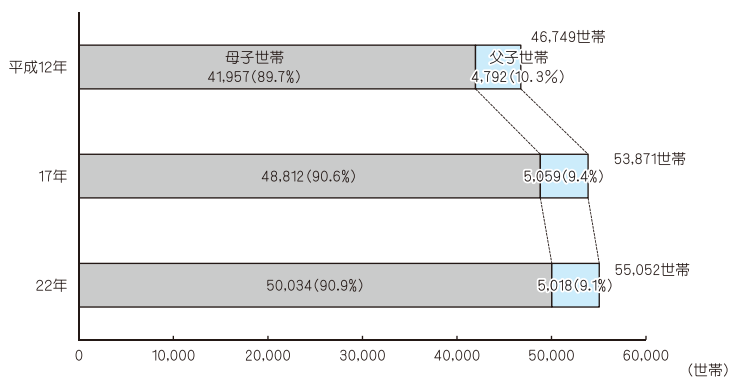
ひとり親世帯のうち母子世帯数は5万34世帯、父子世帯数は5,018世帯で、ひとり親世帯に占める割合は、それぞれ90.9%、9.1%となっており、母子世帯が9割以上を占めています。

(図表1-2-5)

一般世帯に占める母子世帯の割合は、2.1%で、全国の1.5%を上回り、父子世帯では全国と同じ0.2%となっています。

(資料4(P72))

図表1-2-5 母子・父子世帯別ひとり親世帯数の推移(北海道)



資料出所:総務省「国勢調査」[資料4(P72)]

● 第3節 人口動態 ●

1 出生と死亡

本道の出生数は、平成7年に大正、昭和、平成を通して初めて5万人を割り込み、さらにそれ以降も減少を続け、平成22年には、40,158人となっています。

男女別出生数は、男子20,518人、女子19,640人で、出生性比（*1）は104.5となっています。

出生率の推移をみると、昭和50年以降、減少傾向に転じ、平成22年は、出生率では史上最低値の7.3となり、全国値の8.5と比較して1.2ポイント下回っています。

（図表1-3-1）

合計特殊出生率（*2）の推移をみると、昭和50年以降は低下傾向が続き、平成22年は1.21となり、全国値の1.39と比較して0.18ポイント下回っています。

（図表1-3-2）

この出生率の低下の要因は様々ですが、夫婦の平均出生児数にそれほど変化がみられないことから、最近では主として女性の晩婚化や未婚率の上昇などにあるものとみられます。

（図表1-3-3）

一方、平成22年の死亡数は55,404人、死亡率は10.1となっています。

男女別にみると、男性の死亡数は29,845人、死亡率は11.5で、女性の死亡数は25,559人、死亡率は8.8となっています。

死亡率の年次推移をみると、昭和50年代前半の5.6を最低として、その後は上昇傾向で推移しています。（資料6（P74））

また、死亡率を年齢階層別の推移でみると、75歳以上の高齢者の死亡割合が増加しています。（図表1-3-4）

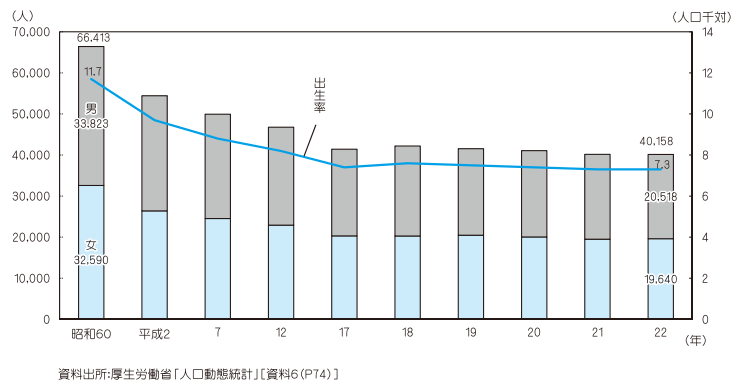
*1 出生性比

生まれた女の子100人に対する男の子の数

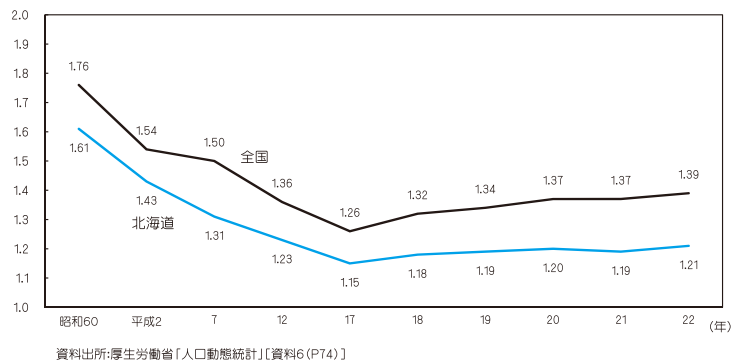
*2 合計特殊出生率

15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとした時の子どもの数に相当する。人口を長期的に維持するためには、2.08以上が必要といわれている。

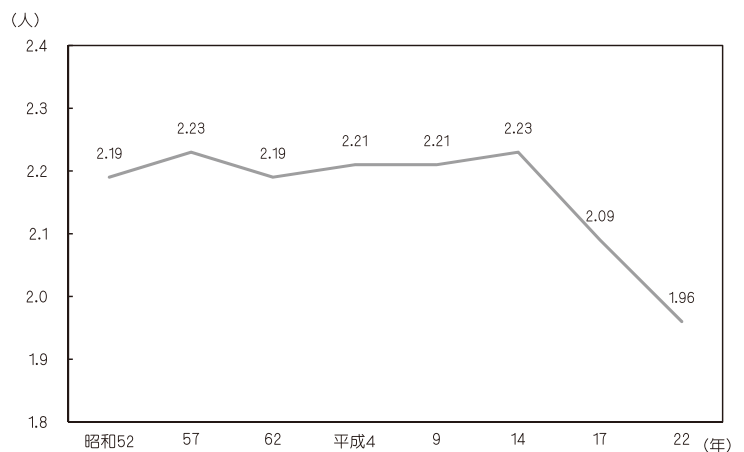
図表1-3-1 出生数と出生率の推移(北海道)



図表1-3-2 合計特殊出生率の推移(北海道、全国)



図表1-3-3 平均出生児数の推移(全国)



注)平均出生児数は、結婚持続期間15～19年の妻を対象とした出生児数の平均

資料出所:国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(昭和52年～平成22年)

道民の平均寿命は、戦後ほぼ一貫して伸び続け、平成21年は女性85.94年、男性78.88年で過去最高となり、昭和25年から平成21年までの59年間に、女性は25.06年、男性は20.99年寿命が伸びています。（図表1-3-5）

（資料8（P76））

こうした平均寿命の著しい伸びなどに伴い、高齢化が急速に進んでいます。

平成22年の「国勢調査」によると、本道の老年人口は136万人、総人口に占める割合は24.7%となっています。

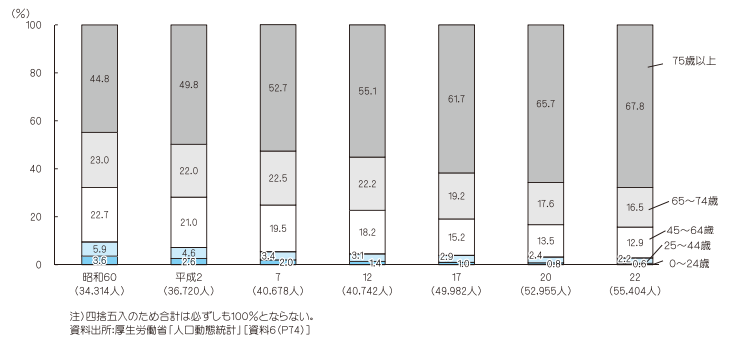
老年人口の推移をみると、昭和30年では18万6千人、総人口に占める割合は3.9%でしたが、その後は急速に増加を続け、この55年間で7.3倍となり、平成7年には初めて全国（14.5%）を上回りました。

（図表1-3-6）

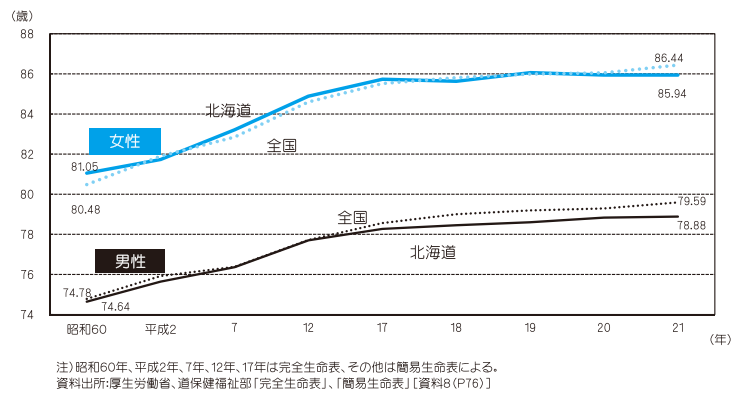
また、75歳以上の後期高齢者人口をみると、平成22年は67万人で、昭和30年と比べると、12.4倍となっており、老年人口の中でも後期高齢者人口の増加が著しくなっています。

（資料2（P70））

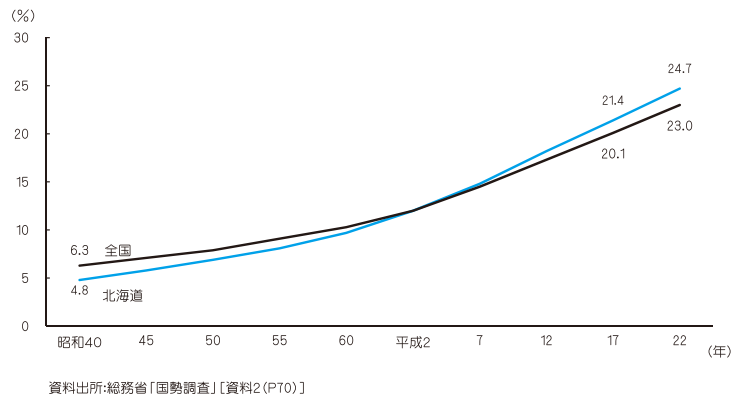
図表1-3-4 年齢階層別死亡者の推移(北海道)



図表1-3-5 平均寿命の推移(北海道、全国)



図表1-3-6 老年人口割合の推移(北海道、全国)



2 結婚と離婚

平成22年の婚姻件数は、28,389件で、婚姻率（*1）は、全国平均の5.5をやや下回る5.2となっています。（資料9（P77））

平成22年の平均初婚年齢をみると男性が30.1歳、女性が28.7歳で、初婚年齢の上昇が目立っています。（図表1-3-7）

平成22年の「国勢調査」から、未婚率（*2）をみると、男性が29.6%、女性が22.7%となっており、全国平均（男性31.3%、女性22.9%）を下回っていますが、平成17年（男性29.1%、女性22.7%）と比べると男性が増加しているが、女性は横ばいとなっています。

これを年齢階級別に未婚率をみると、ほとんどの年齢階級で上昇し、特に男性、女性ともに40歳～44歳の未婚率の上昇が顕著となっています。（図表1-3-8）

一方、平成22年の離婚件数は12,596件、離婚率（*3）は、平成3年以降上昇し続け、平成8年には昭和61年以降10年ぶりに2.00台（2.06）になり、平成14年には2.77とさらに増加したが、これ以降減少する傾向となっています。（資料9（P77））

同居期間別の離婚割合では、5～10年未満が最も多くなっています。

（資料11（P79））

* 1 婚姻率

人口千人あたりに占める結婚の割合

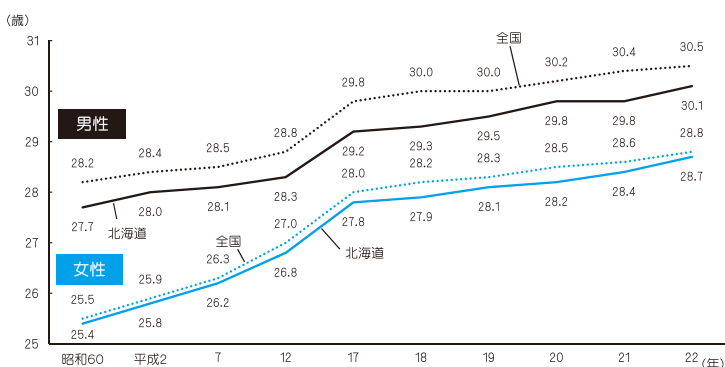
* 2 未婚率

15歳以上人口における未婚者の割合

* 3 離婚率

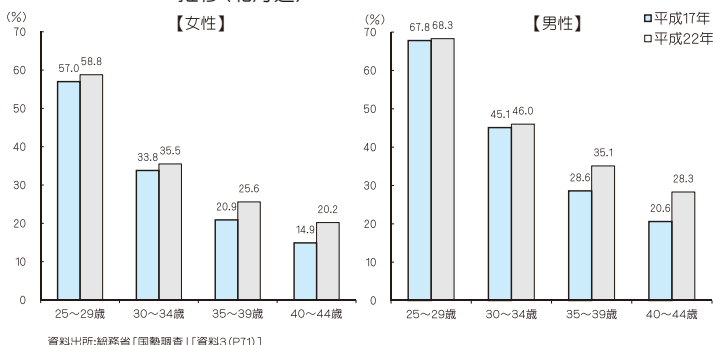
人口千人あたりに占める離婚の割合

図表1-3-7 平均初婚年齢の推移（北海道、全国）



資料出所：厚生労働省「人口動態統計」〔資料10（P78）〕

図表1-3-8 男女、25歳から44歳の5階級別未婚率の推移（北海道）



資料出所：総務省「国勢調査」〔資料3（P11）〕

